沖縄らしい景観づくりのためにできること

●伊礼：様々な立場で、さまざまな視点から沖縄の景観についての考えをお聞きします

●上間：そこに住んでいると、その地の魅力はなかなか分からないと思う。私が映画の誘致を行うようになった13年前、映画監督たちが集落の「汚さ・古さ」を「映画的な味」と評価し、誇れるものであると知らされた。「映像的な引き付ける魅力がある」ことを、徐々に地域の住民が理解するようになり自分たちの集落をきれいにしようという、意識が芽生えた。撮影を通じて、地域の活性化、景観づくりの啓蒙活動につながった。

●五十嵐：そこに住んでいる人の視点だけでは、何が良いのか悪いのかもなかなか気づけない。

●ベンビー：私の出身の沖縄市はご存じのとおりアメリカな町。特にほとんどがコンクリートの建築物で横文字の看板ばかりなので、どこを「沖縄らしさ」と言ってよいか分からない。自分にとっては、赤瓦よりコンクリートのほうが、沖縄らしいと感じられる。「沖縄らしさって、何？」

●古谷：沖縄といえば自然と人のつながり、自然崇拝。特に海の環境がなだらかだったり、断崖だったりによってそこに暮らす人々の気性や慣習、文化が異なってくる。宮古島と八重山地域がなどで特にそういう印象を強く受ける。険しい海に潜る宮古島では、男女の役割が明確になっていて日々の営みも独特。

●伊礼：景観というと、建築などによる「不動産」としてとらえられがちだけど実際には、その暮らす人々の営み「動産」がある。土地や家の上に積み上げられて出来るものが「風景」。
つまりは、暮らしに変化があると自ずと、景観にも影響がでる。

●古谷：都市部では大分失われてしまったが、漁村では、その原風景がまだまだ残っている。海があって、旧暦があって、「沖縄の暮らし」は成り立っている。特に、写真を通じてフレームに入れてみると、地と陸が近いことに気付く。景色として地から陸を見下ろし、海を見る。そこに建つ家もまた、雨戸を外すことが当然の空間にあり、そのフレームを見ると人が地ととても近いことに気付く。
道ジュネーが行われる庭先では、人の暮らすための空間が目いっぱいあり、その空間により人が繋がっている

●伊礼：最近では、どのような空間もプロの業者が入ってキッチリ行うので、昔のように「味」がでるような自分づくり、自分仕立ての空間がなくなっている。そういう意味でも風景は、一昔前と大きく異なる。
そういった部分では、味のある空間を残すことに上間さんは苦労したのでは？
また、ハウスメーカー主体で作られるまちなみが沖縄は「自由」な感がある、特にコザは独特。

●上間：当初は、撮影がくると庭先で寒風摩擦ができなくなる、などの苦情もあったが、風景・まちなみを切り抜きにくる撮影隊のお蔭で、お年寄りはエキストラ出演などにはりきり、子供たちは芸能人やスターを夢見るなど、地域が明るく元気になった。これも、風景・まちなみが残っていてこそ。今では、撮影のために伸びたフクギを切ろう、壊れたトタンを修繕しようとみんな自主的に活動している

●ベンビー：コザは、アメリカ感が強いけれど、裏通りやさびれた市場などは、なんとも言えないディープさが漂っている。その雰囲気は、那覇のものとは大きく異なっていると思う。
そこに暮らす「人」が違うからなんでしょうね。

●古谷：現在でも読谷村などは、海岸線が自然のままで残っており、そういう「沖縄らしさ」が残っている。

●五十嵐：僕個人としては、沖縄といえば、「コンクリート造り」。コザのまちなみこそ「沖縄らしさ」と感じている。都市としてのコザには魅力を感じる。「ジャンル映画としての赤瓦」という実験的な形からでも、安易にならない思考で、コンクリートに赤瓦をのせる施策をしてもよいのでは、と思う。

●伊礼：そういった意味では、ごつごつして「毛深い」印象だった沖縄の建築物が、最近はツルッとした建物が増えたような印象はうける。「らしさ」が失われているのかも知れないですね。

●上間：今帰仁村では、今年の9月から景観条例が施行されたけど、村への連絡調整はあっても「区」までは情報が下りてこない。制度的な課題や運用での調整は必要だけど、できてしまうものはしょうがない。「どう地域になじませていくか」ということにも、取り組んでいく段階。幸い同世代が、景観づくりに盛り上がっており、最近も地区の街灯をレトロな淡い光のものかえ、雰囲気がさらによくなっている。

●ベンビー：県外にでて帰ってみると那覇より中部のまちなみにやはり、懐かしさを感じる。「沖縄そば」の看板をみるとやはり「帰ってきたな～」と思える。ただし、コザは、いろいろと試行錯誤を重ねているが、ディープさが増すばかりの「惜しいまち」になっている。

（質疑応答）

●会場①：読谷村座喜味城の景観づくり取り組んでいる。生活者の視点と景観を見る側の視点は大きくことなると思う。住みよい環境づくりこそ、景観づくりだと考えるが、五十嵐先生の考えを聞きたい。

●五十嵐：海外の事例でみれば、ヴェネツィアなどは水上都市として車が無く大変不便。だが、暮らす人は、
そこに不自由を感じてはいない。長い歴史あってこそだが、長い年月をかけて残されていくものにはそれなりの価値や評価がついている。古いものや廃墟なども、その時代時代につくられた意味があり、長い歴史の中で再評価されたり、再利用の方法が生まれることもある。

●上間：今帰仁村では、現在3か月に一度、区長を対象に集落の景観向上のセミナーを開催している。

●会場②：五十嵐先生のいう、「ジャンル映画として赤瓦をつかってみる」という考えにおいては、赤瓦建築群すなわち「ユートピア」的なものを、連想させられた。形骸化した、記号化したものをつかっていくことの先に何があるのか？

●五十嵐：安直にハリボテとしての赤瓦建築をどんどん作るのではなく、また同時に「新しいモノに価値を見出そう」とコロコロ目先をかえるのではなく、これまでの赤瓦が沖縄で用いられた歴史もふまえ今の姿に考えながら「足す」ことに気を遣うべきだと考える。

●会場③：竹富島のようにテーマパークとなった赤瓦景観でないものは、どのように作られるべきか？

●五十嵐：地域主義が行き過ぎてしまうと、排他的でその他のものが抹消されることを危惧する。
長いスパンの中で、それぞれの風景や景観は評価されるべきものなので、そういったものとの共存・切磋琢磨しながらやっていくことで、道は開けると思う。
個人的には、コザのパークアベニューやコリンザに興味があるのでこれからも沖縄に関わっていきたい。